



桜の木の下で

村山 早紀

プロフィール

93年、幼年童話『ちいさい
えりちゃん』でデビュー。
シェーラ姫シリーズ全20巻
はじめ、著書多数。HPで
は猫の飼い方まで指南する
無類の猫好き。

ひさしぶりに、ゆりちゃんが帰ってきた。

「ただいま、さくら。あいかわらず、真っ白で、きれいだねえ」
玄関に迎えに行ったあたしの頭を、優しくなでてくれる。
「いくつになっても、かわいいねえ」

ゆりちゃんもね。あたしは心の中でそういって、のどを
鳴らしながら、ゆりちゃんをみあげる。

ゆりちゃんは、あたしと同じで十五歳。

あうのは、何年ぶりだっけ。ガッコウがシリツで遠いから、このうちにはあんまりこれなくなっちゃった。あうた
びに大きくなるみたい。背丈がのびて、おとなのひとみたい。
奥からおばあちゃんたちが、お帰りなさいってゆりちゃんにいいながらでてきた。みんな嬉しそう。今日は大みそか。この家に、おばあちゃんのシンセキのひとが集まる日だ。
ゆりちゃんがおとなっぽくなったと、おばあちゃんやみんなが声を上げる。あたしもうなずく。しっぽをたてて。
荷物を持って上に上がってきたゆりちゃんの足に、あたしはそっと頭をこすりつけた。

ゆりちゃん。十年前、はじめてこの家であったときは、
あたしは五歳。ゆりちゃんも五歳。同じ年でもあたしは猫で、
ゆりちゃんは人間だったから、あたしはもう立派なおとな
で、小さなゆりちゃんのお姉さんみたくだったね。あのとき
も大みそか。雪が降って寒い夜。あたしは寒がりの小さな
ゆりちゃんの胸元にだっこされて、あつためてやったつけ。
昔を思いだしてのどを鳴らしていると、おばあちゃんが
そっと、あたしの頭に手を乗せて、ゆりちゃんにいった。
「さくらはすっかり年を取ってしまった。もう一日寝てば
かりなんだよ。おばあちゃん猫さ」

失礼ね。あたしはしっぽをぶんと振った。

夕方が近づくにつれて、おばあちゃんの家の中は、おとなと子どもでいっぱいになった。お台所には、おかあさんやおばあちゃんたちがぎゅうぎゅうになって入って、それぞれにお料理をしている。お父さんやおじさんや、子どもたちが、できあがったお皿を、お部屋に運んでくる。
テレビはニュースが終わって、コウハクウタガッセンが